

「身装」画像データベース構築のための画像データの評価方法

高橋晴子

大阪樟蔭女子大学 学芸学部

本研究においては、身装画像データベース構築のための、関連画像データに関する合理的な採録方法について述べる。まず、画像を採録するにあたっての、画像掲載メディアと、画像そのもの—写真と絵画の、資料批判を行う。つぎに、採録した画像に描かれた内容の信憑性をはかるために、図鑑と、年表の、どちらもの性格をそなえた同定資料の必要性について述べ、そしてその同定資料を作成するための基礎資料について説明する。最後に、身装との関連において、とくに需要の高い、感覚的価値を表す用語〈美しいひと〉についての、具体的な画像と検索語を提示するために用いる、資料の紹介を行う。

The way of evaluating a related image for the Costume Image Database building

TAKAHASHI Haruko

The Osaka Shoin Women's College, The Faculty of Liberal Arts

This paper describes the rational selection way of the related image data for Costume Image Database building. First, it criticizes the media carrying image, and the image itself—photograph and picture. Next, it describes the necessity of the reference material for identification which was equipped with either of illustrated book and chronological table to verify the credibility of the contents illustrated in image, and also explains the basic materials to make this reference material. Lastly, it describes the materials to present the concrete image and its retrieval words about the sensual terminology <beautiful woman> which is highly demanded.

1. 本研究の目的と意義

われわれデータベースプロジェクト-MCDプロジェクト¹⁾は、過去15年間にわたって、身装関連データの収集にたずさわって、それを用いて構築された5つのデータベースは、すでに国立民族学博物館のネットを通じて、公開されている²⁾。

そのうち、4つのデータベースは文献データベースであり、残りのひとつは、国立民族学博物館所蔵衣服標本の画像データベースである。このほかに相当量蓄積されている身装

画像データ（以下、画像データ）があり、これについては、主として検索項目³⁾と検索システム⁴⁾の検討を重ねてきた。

本研究においては、身装画像データベース構築のための、画像データに関する、合理的な採録方法について考えてみたい。これまで手がけてきた文献データと比較して、画像データの問題のひとつは、その信頼性である。文献データの場合は、書誌的記述を含めての記事自体が、内容の信頼度を示すのであって、その評価は、基本的に利用する人に任せられてよい。しかし画像についていえば、画像だけを見せられたひとは、その書誌的信頼性についての判断はくたせない。それにくわえて、文献データと異なり画像データの場合、その出現は無限といってもよいわけであり、したがってたとえば‘衣服を着ているひと’の写真をなにかも集める、ということは、不可能でもあり、無意味でもある。

このような理由から、一般に、ある主題に関する画像データベースについては、資料構築の段階で、一定の規準にもとづいた評価と、思い切った取捨が必要である。本研究はそのような、画像データ採録のための、身装関連資料の資料性の評価方法の検討を、目的としている。

まず、「身装」の概念であるが、身体、および身体を装うためのモノと、それをささえるコトガラと情景のすべてを含み、風俗現象のひとつとしてとらえることができる。一般にこのような風俗領域資料は、それが置かれた環境と切り離して理解することは、むずかしくもあり、危険でもある。

そのために、私の最終的に意図する身装画像データベースは、ある情景のなかで人が装っている具体的な画像を主とし、必要に応じてモノとしての衣服と、装身具そのものの画像を採録することを原則とする。人の装う「情景」を視野にいれるということは、採録画像データのおおかたは、具体的な生活の営みにかかわっているものが、収集されることになる。

‘生活の営み’にかかわる画像データを使って作成されたデータベースは、将来、人類学および芸術学の研究と教育に、あるいは、映画・舞台等のシーンづくりに役立つと考えられる。このような分野での利用を考えると、画像に表現されたモノとコトガラの信憑性は、重要な要素となろう。そしてこれに対処するには、採録する画像データの可能なかぎりの批判・評価が必要となるのである。

現在の画像データ数は、約12万件である。データは地域的にも日本、西洋、民族の大きな3グループに区分され、対象となるのは、1868年以降約100年間の、日本の身装を対象とする分のみであり、対象データ量は、およそ3万～4万件と推定される。採録画像データのタイプは、挿絵、イラスト等を含む絵画、写真の静止画像であり、動画は含んでいない。

なお、現在Web上で公開されている関連画像データベースにかぎって言えば、本衣服標本画像データベースに見るように、モノとしての衣服そのもの、およびそれに付随する属性データを提供しているのが、いまのところ主流である。この点においても、「情景」のなかで、衣服と装いをとらえるということは、オリジナリティがあると考えられる。

2. 画像資料の評価

データベースのために画像データを採録する場合、原作品に直接あたるのではなく、た

たとえば、本画については美術画集から、挿絵については雑誌から、というように、それらが掲載されている資料を通して、データを収集するのが効率的であり、またそのような方法をとらない限り、大量のデータは収集できない。そのためには画像掲載メディアそのものの批判、そしてそのメディアに掲載されている画像のタイプの批判が、まず必要である。

2.1 画像掲載メディア

2.1.1 雑誌・新聞

雑誌・新聞掲載画像資料のメリットは、成立年代の下限が確定される点である。一方、成立年代の上限の確定はむずかしい。19世紀後半から欧米では多くの画報誌が創刊されたが、風景・ドキュメンタリ写真については、10年近い以前に掲出した図版とおなじものが、撮影あるいは作画時期の記述もなしに、再利用されていることがしばしば見出される⁵⁾。

また、雑誌および新聞から画像を採録する場合、どのような読者層によって、その雑誌等が読まれていたか、ということもひとつの基準となる。

2.1.2 図書

身装についての画像を豊富に提供しているのが、服装関連文献と、美容関連文献であることは言うまでもないが、一般書の中にも重要な画像を見いだす場合がある。すなわち、一般書に掲載されている画像も採録の対象とする場合、網羅性が重要な要素となる。

2.2 画像のタイプ

2.2.1 写真

絵画とくらべての写真の特質は、対象と、とらえられたコピーとのあいだの、正確な、鏡のような同一性である。鏡とのちがいは、対象をある静止した瞬間の、一定の枠内に限定することである。しかし現実に存在するものは、すべて時間の流れのなかにあり、空間的拡がりの一部分として存在しているのだから、対象をある瞬間と、ちいさな枠で切りとる行為は、それだけでひとつの‘仮想現実’をつくりだすことになる。

風俗資料として写真をもちいる場合は、写っているものが、現実、あるいは実生活のコピーなのではなく、‘被写体’のコピーであることを、まず認識すべきである。

写真資料へのもうひとつの基本的な注意点は、被写体が撮影されてから、それがわれわれに提供されるまでの、処理・加工についてである。本論で対象とする期間のはじめには、手彩色写真類が喜ばれていて(図1)、うっかりすると、共通した甘い印象をもつ色調を、本来の色調と思いこむ危険性がある。

被写体の正確なコピー、という写真の特性は、実際にわれわれに提供される写真の属性の出発点にすぎず、到着点ではない、という事実を、身装画像データベース構築者がわきまえる必要がある。



(図1)



(図2)

2.2.2 絵画

身装資料として用いられるものは、だいたいが風俗画の範囲にはいるものが多い。

風俗画(図2)は単純に‘日常生活に取材した絵画’と定義されている。(新潮 世界美術事典 1985 1237p.) 日々の生活のなかの個々の事実の描写が、風俗資料としての風俗画への信頼の基礎となるが、身装画像データベースの素材としては、その信憑性が問題である。

今回の対象画像データではないが、近世の浮世絵類は、風俗資料としての適当さと限界とをあわせもっている。その理由は、技術的制約、ということ以上に、その表現が、強い様式のもとにあるためである。たとえば、どの女性もが一様におちよぼ口の狐顔であり、そのポーズもいくつかの種類の範囲をでない。この事実は、作者を拘束し、または、安易に凭れたままであったその様式が、どれほど事実を歪曲していたか、という問題に、直面する。

近世の浮世絵におけるそのような様式性が、すくなくとも19世紀末(明治中期)までの風俗画に、多かれ少なかれ影響を残していたことは、明らかである。たとえば、松園や清方の描く、風俗画の1ジャンルであるとされる美人画(図3)にも、その近代的なリアリズム表現の一方で、とりわけ女性の表情や居ずまいのうちに、前近代的な女性認識の定型性のつきまとうのを見分けることができる。

最後に、身装資料として逸することのできないのは、雑誌の表紙絵(図4)、あるいは新聞・雑誌掲載の、現代小説の挿絵などである。たとえば、挿絵が風俗資料として貴重であるのは、人気小説が、多くの同時代人の読者に支持され、全体として‘承認されている’、という事実である。初期のいわゆる続き物の時代から、1920, 30年代の大衆・通俗小説全盛の時代まで、新聞小説の読者は一般には素朴であり、小説を本当のこのように、ときには自分自身のこのように、感情移入して読むのであった。このような読み方に対して提供される挿絵が、読者たちの納得するリアリティをもたなければならないことは、当然であろう。



(図3)



(図4)



(図5)

3. 文献をもちいての、画像中の身装属性の分析・批判

第2章で述べたように、資料性に留意しながら収集された画像中の、身装を構成する諸属性の信憑性をはかるためには、信頼できる同定資料が必要である。同定資料を作成することは、近代日本身装史を叙述することとかがりなく近い行為であるが、文化論としての歴史的叙述とちがって、これは原則として、コトガラの意味やナゼに踏み込んで追求する

ことはない。いわばきわめて即物的で明快な、モノの分布・配列・相関の、平面図が必要とされるだけである。たとえば年代確定のためには、身装属性の個々の部分についての、信頼性の高い画像の年表が必要であり、もし美容であれば、ヘアスタイルや化粧の変化の、年を追っての具体的なイメージ・リストが不可欠である。

この章は、図鑑、および年表の、どちらももの性格をそなえる同定資料を作成するための、方法論である。基礎となる資料は、雑誌・新聞の解説記事であり、さらに、それらの解説記事を、特定の観察者による論評によって、裏付ける方法をとる。

3.1 雑誌・新聞における解説記事

同定資料を作成するための基礎資料として、雑誌の場合は、1)『文芸倶楽部』(博文館)や『新小説』(春陽堂)などの文芸雑誌の流行欄、2)三越の『時好]、高島屋の『新衣裳]、白木屋の『流行]などの呉服店等のPR誌、3)婦人雑誌の服装記事、4)服装専門誌、5)研究論文などが基礎資料となる。なお、これらについての資料批判は、つぎの論文「近代日本の雑誌ジャーナリズムにおける身装関連記事」⁶⁾でおこなっている。

新聞の場合、1)家庭・婦人欄、および2)相談欄が有用である。家庭・婦人欄が充実していた読売新聞、そして、1906年に最初の相談欄を設けた都新聞は、採録対象誌としては、とくに重要である。さらに、新聞社における婦人記者の存在も、たとえば、相談欄等での対応が的を得ていることから、その新聞を採録対象とするかどうかの条件のひとつとなる。

3.2 特定の観察者による論評

例一 鏑木清方の身装観察

画像データの年代等の同定のため、信頼性の高い同時代記録として、とくに‘然るべきひと’達の、観察・論評がのこされている。たとえば、美人画家の鏑木清方(1878-1972)である。

清方は、明治生まれの多くの美人画家とおなじように、終生篤実に costume doll を追いつづけたひと、といてよい。しかしそのことは、清方が同定資料作成のためのよいインフォーマントである条件の、もっとも基底的なことにすぎない。

画家である清方の、観察・批判者としての重要性の第一は、彼がその観察したものを、丹念に文章にとどめている点である。彼が画筆とあわせて文筆にも長じ、『鏑木清方文集』⁷⁾の8巻をのこしていることは、彼の筆まめと、またその文章が世の中に喜ばれたことを証明している。

清方の身装についての文章は、第6巻、「時粧風俗」でまとめて読むことができる。また、中央美術社の『日本風俗画大成 明治時代』⁸⁾の作品解説を、清方が担当してる。これらは、明治・大正期の女性の身装の、クロノジカルなデータとしては、基本的資料のひとつとなりうるであろう。

鏑木清方のほか、木村荘八、花柳章太郎、森田たま、宇野千代などの作品を対象とする。

4. <美しいひと>の類型人物像(類型イメージ)

身装画像データベースはさまざまな条件のもとの、身装と密着している人物像 personal image の類型を提供することができる。実際、情景の中で人の装っている画像を求める人は、人物そのものを表現する言葉で、検索しようとする場合が多い。その人物類型のうち、興味をもたれ、需要も多いと思われるにもかかわらず、事例として提供するの

がむずかしいのは、‘美しいひと’という概念である。

このような、感覚的価値に属する身装属性を含むと考えられる概念は、ほかに、つつまじやかな人、快活な人、あるいは、モダンガール(図5)、夜の女風、など数多い。

感覚的価値に属する身装属性をもつ人物像も、その時代の雑誌グラビアの、たとえば、‘颯爽と銀座を歩くモダンガール’というキャプションをそのまま信用するなら、ある程度の事例を拾うことはできる。

しかしこの場合、モダンガールというキャプションがあればモダンガールだが、まったくおなじ身なりであって、なにも説明がなければモダンガールではないのか、もし後者にも、‘モダンガール’というおなじ検索語をつけるのなら、それではモダンガールの条件とはなんなのか?という疑念の起きるのは当然であろう。

画像データベースのむずかしさは、利用者が、visualな対象を検索する際に、感覚上の印象を言葉で表現することである。

ここでは、そのような属性概念のなかから、‘美しいひと’について、当該時代の人々が認識していた条件を、4つのメディア枠のなかで探り、〈美しいひと〉の諸類型イメージを具体的に、画像と、検索語で証明する。

そして、その画像と、キーワードの信憑性を、3章で作成した同定資料によって、裏付ける方法をとる。

4.1 流行小説のなかの身装理念

ある時代のより多くの人々の、より一般的な好みを知るための、根拠となる資料として、芸術的評価とは関係なく、いわゆる流行作家の、人気作品を対象にした。これらの作品では、たとえば、登場人物の着るものについても、詳細を究めることが少なくない。

時代にかかわらず、身装が記号的意味をもつのは当然であるが、当時の作家が、身装描写にこれほど凝ったひとつの理由は、身なりと、その人物とのあいだの関係が、現代にくらべてはるかに深く、物語の展開にとって、またその展開を読者に十分理解させるために、重要と考えられたためである。‘洋服拵えの男’‘銘仙の羽織を着た娘’と書いてあるだけでも、ある時代の人々は、ほぼ共通のイメージをもつことができたのである。明治開化期の仮名垣魯文から、小杉天外、菊池幽芳、渡辺霞亭、竹田敏彦、吉屋信子らを経て、戦後の菊田一夫、源氏鶏太等に到る、長編同時代小説100余作品が、この項の分析の素材である。

4.2 人物画における身装理念

例－抒情(美人)画のなかの美しいひと

抒情(美人)画といわれるグループの作品は、1910年代から’30年代にかけて、もともとは少女雑誌や、若い女性を対象にした商品の、商業美術として広くうけいれられた、人物画である。これらはファッションへの影響も大きかった。

日本のある時期の美しいひとと像を考えると、まず、松園や清方の美人画作品を思い浮かべがちであるが、しかしもっと多くの大衆-majorityがいつも接して、影響を受け合った美術が、映画や、雑誌の挿絵、そして各種の商業美術であったことは疑いない。そしてこの時期の竹久夢二、高島華宵、露谷虹児等の、それぞれの画家が描く〈美しいひと〉を、それぞれの画家特有の〈美しいひと〉のタイプとして、類型化することができるであろう。

4.3 美容業界の身装理念

業界に実際に生きたひとたちへの聞き取り調査を基礎資料とし、地方誌、および町村是等でかためる。

ある時代の〈美しいひと〉の典型的イメージをさぐるために、美容業界のめざした方向を探る、という方法は、これまであまり考えられなかった。しかし、女性の髪型、化粧、着付けに実際に手をくだし、また身近な専門的相談相手である美容師のもつ価値観と、それをリードする美容業界の構造と動向は、〈美しいひと〉の形成に、よかれ悪しかれ一定の影響をもったと考えてよい。聞き取り調査については、1920年以降の情報を得ているので、これは、文献や造形作品の伝える内容に、ある面からの補訂の役割を、果たすことができると考える。

4.4 各時代の特定メディアにあらわれた身装理念

ある時代、あるメディアの〈美しいひと〉の、共通のタイプをおさえることによって、特定メディアの身装理念を明らかにする。

たとえば、絵はがき美人風、『PLAY BOY』風、『Camera Work』風、などが、成り立つのではないかと考える。ここでは、『Camera Work』⁹⁾など、参考として、国外の写真関連資料等も利用する。

5. あとがき

身装画像データベースを構築するための、画像データの採録方法について述べたが、現時点では、採録方法を紹介するにとどめる。

なお、作成中の同定資料のうち、とくに年表ソフトが開発できないものかと考えてる。年表ソフトというと、年を軸にして、いつどのような事が始まり、いつそれが終わったか、を表現するのが普通であろうが、身装の場合、流行を例にとっても、ある流行が突然生まれ、そして、ある時、まったく消滅してしまうというものではない。いつも現象としてはあり、それがバイオリズムのように高くなったり、低くなったりするのである。そしてまた、流行現象はひとつではなく、つねにいくつかの現象が混在する。複数の流行現象の、この高低を表現できるソフトがあればと考えている。

最後に、民博のネット上で公開されているデータベース、および検索システムと検索項目の研究については、文部科学省科学研究費（重点、特定、基盤、研究成果公開促進費（データベース））の成果によっていることを付記しておく。

注)

1) 高橋晴子（大阪樟蔭女子大学）、久保正敏・大丸弘（国立民族学博物館）、八村広三郎（立命館大学）、猿田佳那子（同志社女子大学）、田中昌美（愛知新城大谷短期大学）

2) 〈服装・身装（コスチューム）データベース〉（<http://www.minpaku.ac.jp>）

3) 高橋晴子「「身装」画像データベースにおける検索項目の構造」『アート・ドキュメンテーション研究』No. 7, 1999, pp. 3-11

高橋晴子「「身装」画像データベースにおける検索項目の構造(2)－情景の中における身装の位置づけ」『アート・ドキュメンテーション研究』No. 9, 2001, pp. 12-27

4) 高橋晴子、八村広三郎、久保正敏「身装マルチメディアデータベースの作成とその評

価」『情報管理』No. 43 Vol. 9, 2000, pp. 791-800

- 5) 例えば、*Our islands and their people as seen with camera and pencil.*, N.D. Thompson., c1899, *Tour du Monde. Nouvelle Serie.*, Librairie Hachette., 1895-など
- 6) 高橋晴子『ファッション・ドキュメンテーション』No. 5 1995, pp. 47-61
- 7) 鎗木清方 白鳳社 1980年
- 8) 中央美術社 1929年1月
- 9) *camera work: photographic quarterly.*, Kraus Reprint., 1903-

図)

- 図1) 手彩色写真例
- 図2) 鎗木清方編『日本風俗画大成 明治時代』中央美術社 1929年1月
- 図3) 鎗木清方面「棧敷の人」1914年3月
- 図4) 蒔谷虹児『令女界』1巻8号 1922年11月
- 図5) 三越百貨店PR誌『大阪の三越』1931年10月より